スペイン語の SVO/VOS 語順とイントネーションの関係について

高澤美由紀
（亜細亜大学）

スペイン語は語順が比較的自由とされる言語ではあるが、野田(1983)などは語順が情報構造の制約を受けるという事実を報告している。また Zubizarreta(1999)は、主語 S が目的語 O に先行し、O が前置詞句 P に先行するのが無標の語順であるが、疑問に対する答えの要点の部分が S や O に該当する場合には核アクセントの 1 つである中立アクセントが中立焦点である S や O に置かれるようにするために VOS, VOPS, VPO という 3 種類の有標の語順を必要とすることがあると指摘している。一方、語順と並んでイントネーションも情報機能の影響をうけることが Sosa(1999)や高澤(2008, 2013)において報告されている。

以上のことから、無標の語順である SVO と有標の語順である VOS において、音調句全体が焦点になる広焦点、疑問に対する答えの要点の部分が焦点になる狭焦点、焦点になっている要素と競合関係にある他の要素を対照させて前者が正しい要素であると主張する対照焦点の 3 つが、それぞれどのようなイントネーションで実現されるのかを調べた。使用したのはイベリア半島のスペイン語母語話者 2 名による朗読音声である。朗読文はいずれ CV 型の 9 音節からなり、全ての語が後ろから 2 番目の音節にアクセントを持つ 1) <u>Lola</u> mira la torre blanca.「ロラは白い塔を見る。」と全ての語が最後の音節にアクセントを持つ 2) <u>José</u> miró el reloj solar.「ホセは日時計を見た。」という無標の SVO 語順の文、およびそれぞれの主語を文末に置いて有標の VOS 語順にした 2 文の計 4 文である。それぞれの文は広焦点、狭焦点、対照焦点を含む 3 種類の発話として実現された。下線をひいた語が狭焦点と対照焦点におけるターゲット語である。分析対象とした発話は 4 文×3 焦点×5 回繰り返し×2 名＝120 発話である。

その結果、SVO 語順の発話においては、1)と 2)のいずれのアクセントパターンでも、広焦点ではほぼすべての発話でイントネーションはダウンステップを示し、特に後ろから 2 番目の音節にアクセントを持つ語からなる 1)の発話では、L*+H L*+H L* L*L%といったように、Sosa(1999)が言及した平叙文発話の音調表記、$[L^*+H]^n$ L*L%に類似したパターンを示した。また、狭焦点の発話でも広焦点と類似の音調パターンが見られたが、さらにターゲット語の基本周波数の最高値と最低値の差が大きい傾向が見られた。対照焦点の発話でも狭焦点と同様にターゲット語の基本周波数の最高値と最低値の差が大きい傾向が見られたほか、ターゲット語の後にポーズを置いて 1 発話を 2 つのメロディーグループに分け、ターゲット語を際立たせる傾向が見られた。一方、VOS 語順の発話においては、狭焦点と対照焦点のターゲット語が発話末に位置することから、発話内の基本周波数がターゲット語で最低値を示すのは自然であるが、ターゲット語の直前の音節において、発話頭と同じかまたはより高い基本周波数値を示す傾向が見られ、これもターゲット語を際立たせる方略と考えられる。